互いに向き合い、合掌をして気合と共に構えた。その瞬間に、何をするのかすべて忘れてしまった。そのくせ「いったいどうなるのかな」などと、妙に冷静な考えが頭に浮かんだりもした。それでも手足は動き、相手の突き蹴りをさばき、受けながら反攻の技が出た。しかし、三つの投げ技はすべて失敗だった。何をしたのかも分からないまま演武は終わった。苦い自己嫌悪感が残った。とともに、不思議な思いも残っていた。

「頭が空っぽだったのに、なぜ手足が動いたのだろう」。確かにこれまでも乱捕では、考えて出す技より無意識に出た技の方が極まるという経験をしていた。しかしそれは自由な攻防においてである。演武はすべてが決まっている。つまり順序を覚えていなければならない。それなのに頭が真っ白になって、しかし身体は予定通りに動いたのだ。このような経験はその後も何度かあり、これはなぜだろう、という思いが私の心の隅に居座った。

◆燃えよ！カンフー

「テレビで『燃えよ！カンフー』というドラマをやっとるのを知っとるか」と、宗道臣先生が私たちに聞いた。誰も知らなかった。テレビは朝と夕食時に少し見るぐらいだった。「中国の少林寺が描かれていて、なかなか面白い。お前たちも見てみろ」との先生の言葉に私たちは色めき

立った。

当時はやっと日中国交が回復したばかりで、戦後中国へ行った日本人は稀だった。我々少林寺のルーツが中国河南省の嵩山少林寺にあると知ってはいても、そこはどんな地でどんな様子なのか、まして昔はどうだったのかなどは知るすべもなかった。そこへ先生のお勧めである。ドラマの中の嵩山少林寺はきっと往時を彷彿させているに違いない。ワクワクしながらテレビを見た。

ドラマはデイヴィッド・キャラダイン扮する主人公が兄を捜してアメリカ中を旅する、という筋書きだが、ハイライトは主人公の回想シーンにある。そのほとんどは、子どもから青年時代の主人公が少林寺で師の教えを受けるシーンである。その教えの一つ一つが何ともよいのだ。師が子どもの主人公に話しかける。「グラスホッパー（キリギリス。なぜキリギリスと呼ぶのかは分からない）よ、紙は石を包み、ハサミは紙を切り、石はハサミを砕く。このように、己だけが強いということはない。だから争いを求めず相手とともに生きることが大事なのだ」

また、師が池に石を投げ入れながら問う「投げた石が波紋を起こしたのか、それとも池の水が波紋を起こしたのか？」。グラスホッパーは答えられない。師は続ける「波紋は両者によって起こったのだ。この世の出来事で、我がものというものはない。すべては我と他との関係によって起こるのだ」。

また次のごときは興味深い。「少林寺には、三種類の人間がいる。一は師であり、二は弟子である。そして三には生徒である」。ここでは弟子と生徒をはっきりと分けている。それは師と弟子の関係というものが、師と生徒の関係とは厳然と異なるからである。

中国においては、師と弟子とは一体である。弟子の名誉は師の名誉であり、弟子の恥は師の恥である。特に両者の心情的なつながりは大切で、何があっても信じていく深い信頼関係が必須である。弟子に我があってはならない。弟子は自分のすべてをゆだねる覚悟で師に向かう。師は啐啄の機を探りつつ、全力を挙げて自分のすべてを弟子に伝えようとする。互いに心を許し合った、そのような関係を師弟という。

無論これは中国的な概念ではあるが、私たち日本人も多かれ少なかれこのような感覚を持っている。ただ日本では生徒と弟子の区別を意識することは少ない。しかし心のつながりの深さにおいて、自ずから違いはある。心のつながりのことを宗道臣先生は『波長が合う』と表現した。先生はよくこう言った。「NHKが、いくら良い番組を放送しても、君らがそこにチャンネルを合わせなければ、見ることはできんだろう」

『波長を合わせなければ聞こえない』。師と弟子の波長が合って初めて、技と心のエッセンスが伝わるのだ。